E・R・リーチ
『高地ビルマの政治体系』

関本照夫（訳），弘文堂，1995

Edmund R. Leach. 1954. *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: G. Bell and Sons.

孤島の均衡理論からの跳躍

思わぬ偶然が民族誌の名作を生み出す場合がある。第一次世界大戦の勃発がマリノフスキー（B. Malinowski）に長期のフィールド生活を強い，その経験をもとに書かれた『西太平洋の遠洋航海者』が長期参与観察に基づく民族誌のさきがけになったのはその典型であるが，本書もまた，それとよく似た偶然によって生まれた名作といえる。

本書の著者リーチ（E.R. Leach）は，当初はマリノフスキーの指導下に，英領ビルマの北部山地（カチン山地）で 1 年間の村落調査を行うべく 1939 年に渡航したのだが，ビルマに到着した直後に第二次世界大戦が勃発したため，現地で英軍に動員されることになった。日本軍によるビルマ侵攻以後は，カチン非正規部隊を組織する任務に携わってカチン山地の各地を転戦し，その過程でフィールドノートを紛失するという代価を伴いながら，

1946年にようやく除隊している。本書は，そこで失われたフィールドノートを除隊後の歴史文献の渉猟によって補うことで完成したものである。

こうした特異な経験が，従来とは全く異なるスタイルの民族誌を生み出すことになった。それまで主流となっていた民族誌は，のちに「孤島の民族誌」と揶揄されるような，任意の小規模地域社会を切り取り，そこを外界から隔絶された自己完結的な小宇宙とみなし，そこでの均衡維持のメカニズムを共時的に描きだす，というスタイルを特徴としていた。またそこでは，特定の村落から得られた情報をもってその民族全体の理解に拡張することを暗黙裏に前提としていた。それに対しリーチは，カチン，シャンなどの複数民族にまたがる現地調査を，カチン山地全域において行い，さらにそれを地域社会の歴史的な変遷過程に位置づける，というアプローチを選択した。これは上記のように，フィールド調査中に戦争が勃発して軍に動員され，フィールドノートの紛失と引き換えに幅広い視野を手に入れたという彼の経験が，結果的に前例のないスケールに基づく民族誌の誕生を可能にしたものといえる。

共振する山地と平地

本書の舞台となるのは，ビルマ（現ミャンマー）北部山地（カチン山地）の，主にカチンと総称される焼畑耕作民の居住地域である。カチンと呼ばれる人々は実際には非常に雑多な言語集団を含んでおり，その中核はチベット・ビルマ語系のジンポー語集団であるが，そのほかにアツィ語，マル語などの話者も含まれている。カチン山地の河谷には，タイ語系のシャンと呼ばれる水稲耕作民も居住している。シャンは盆地に小規模な王国を有する仏教徒であり，周辺山地のカチンたちは，多くの場合このシャン国家に名目上服属し，またシャンを模倣しようとする傾向を見せる。カチンによるシャンの模倣は，シャンへの文化的・政治的同化（「シャンになる」）を時に帰結する。これらの事例から著者は，言語集団を民族集団とみなし，

それを排他的な分析対象とする研究傾向への警鐘を発している。カチンが「シャンになる」という事例にみられるように，人々が使用言語や民族帰属を変更することは，この地域では頻繁にみられるのであり，しかもカチンという範疇自体が複数の言語集団から構成されていて，なおかつその中でも優勢言語への同化が常に認められるためである。

カチン社会の最も一般的な政体はグムサと呼ばれる。カチン社会においては，末息子相続を伴う父系単系出自によって親族集団（リニージ）が組織され，それぞれのリニージは縁組を通じて階層的に配置される。すなわち，妻の与え手（マユ）リニージが妻の受け手（ダマ）リニージに対して優位に立ち，後者が前者に対して服従の義務を負うというかたちでの階層化である。グムサ体系においては，リニージの階層化はさらに，首長リニージと平民リニージに大別される。グムサ体系の理念型のもとでは，首長リニージの正統な後継者が村落ないし村落群を支配するという小型の首長国が山地に無数に存在し，それぞれの首長は互いにマユ・ダマ間の階層秩序によって結びつけられていることになる。

ただしこのシステムは，均衡体系にはほど遠い不安定なものであるとリーチは指摘する。グムサの階層秩序は理論上はきわめて明確であるが，現実には常に多くの論争を生み出すことになる。なぜならば，男女の同居生活は婚資の支払いをもって初めて正規の結婚とみなされるのだが，しばしば婚資の支払いは未完了の状態に置かれ，その間に生まれた子どもたちは厳密には私生児の扱いを受ける。つまりある人物が首長の末息子の家系であることを主張するとして，そのライバルたちは，数代前の祖先の婚姻の成否や子どもの地位に疑義を呈することで，容易にその主張を無効化できるのである。

実はグムサ体系というのは，そもそも当事者にとってすら理想の姿ではない，とリーチは指摘する。人々が理想とする政体のモデルはシャン型かグムラオ型（後出）であり，グムサというのは常に妥協の産物として成立

する。それゆえにグムサ体系は，シャン型とグムラオ型をそれぞれ志向する人々によって引き裂かれ，不安定化する宿命にある。

ではシャン型，グムラオ型とは何か。シャン型というのは，盆地のシャンが体現する専制王国であり，グムラオ型というのは平等主義的な村落共和国である。上述のように，カチンの政体は一般にシャンを模倣しようとする。つまりグムサ型の首長国というのは，あくまでシャンの専制王国の不完全な模倣だということになる。しかしシャン国家の完全な模倣は困難である。グムサ体系の階層化の論理はあくまで親族組織の婚姻同盟によって成り立っているのに対し，シャン国家のそれは，親族関係ではなく，王族と臣民との断絶にこそ基礎を置く。そのため，カチンのグムサ首長がシャンの王のようにふるまうことは，婚姻同盟の相手であった人々を使用人の地位に格下げする効果を伴うのであり，それがグムラオ派の反乱に口実を提供することになる。しかしグムラオもまた，グムサへの揺り戻しの契機を含んでいる。マユとダマの非対称性こそがカチンの社会組織の根本にある以上は，平等主義は貫徹しえず，婚姻同盟は階層化し，村落共和国はミニ首長国へと逆戻りしていく。

ここから描きだされるのは，シャン型とグムラオ型の間を振り子のように揺れ動くカチン社会の動態である。このような動態を生み出す要因としてリーチが指摘するのが，神話を含む儀礼言語の本質的な曖昧さである。実際にカチン山地においては，シャン型，グムサ型，グムラオ型といった政体の類型をまたいで，同一の神話モチーフや儀礼表現が共有されている。儀礼言語を構成する一つひとつの要素は複数の解釈に開かれており，シャン型，グムラオ型のいずれの理念からも自派に都合のよい解釈を引き出すことができるのであり，そのことが，基本的な儀礼言語の変更を伴うことなく，各アクターの同床異夢がもたらす政体の不安定化や変動をもたらしうるとされている。

東南アジア国家と山地社会

名著と呼ばれる本というのは，読む人の立場に応じてさまざまなストーリーを発展させることのできる本であることが多い。本書もまたその意味で，名著と呼ばれるにふさわしい古典である。ここでは紙幅の関係から，そうしたさまざまなストーリーの中から，東南アジア山地社会論に関する発展可能性を取り上げてみたい。

ここであわせて読んでみたいのが，スコット（J. Scott）の『ゾミア』である。スコットは，東南アジア大陸部山地焼畑民の社会が集住による中央集権化とは正反対のベクトルによって動かされていることに着目し，山地社会の諸制度が国家による統治から逃れることを主たる目的として編成されていると主張する。ここにおいて山地社会は，国家からの逃亡者たちの空間として位置づけられることになる。

このスコットの主張を経由させた後で改めて本書を読み返せば，いくつかのことに気づく。本書においても，焼畑民の小集落への分解傾向（焼畑は広大な休閑林を必要とするため人口密度を低く保つことが望ましい）と，権力の集中への指向（人力の動員のためには人口の集住が望ましい）とのジレンマが，カチンのグムサ社会に根本的な不安定さを与えていると指摘されている。盆地の水稲耕作に基礎を置くシャンは，定住度と人口密度の高い社会を維持することができるが，カチンが山地の焼畑地域でそれを模倣しようとすると，分散傾向が強く移動性の高い人々を引き留めねばならず，そのためには親族集団間の婚姻同盟に基づく互酬関係を維持することが不可欠になるが，まさにそれゆえに，シャンのような専制王権の確立が困難になるのである。

つまり山地社会における集住と分散という命題を，スコットは平地国家からの逃避という文脈で理解したのに対し，リーチは平地国家への憧憬と模倣の文脈で説明する。見えている景色は 2 人ともほぼ同じである。スコットは，山地社会の住人が，国家の桎梏を嫌って平地から逃亡してきた

人たちによって構成されていると主張する。これを本書冒頭の「シャンになる」という逸話と組み合わせて考えてみると，平地民が「山地民になる」遠心的力学と，山地民が「シャンになる」求心的力学が相補的に作用している点こそが，東南アジア大陸部山地社会の面白さを規定していることに気づかされるのである。

参考・関連文献

アダム・クーパー．鈴木清史（訳）．2008．『人類学の歴史―人類学と人類学者』明石書店．（原著：Kuper, Adam. 1996. *Anthropology and Anthropologists*. London: Routledge.）

B・マリノフスキ．増田義郎（訳）．2010．『西太平洋の遠洋航海者』（講談社学術文庫）講談社．（原著：Malinowski, Bronislaw. 1922. *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: Routledge & Kegan Paul.）

ジェームス・C・スコット．佐藤仁（監訳）．2013．『ゾミア―脱国家の世界史』みすず書房．（原著：Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.）

関本照夫．1987．「東南アジア的王権の構造」『現代の社会人類学 3 ―国家と文明への過程』伊藤亜人ほか（編）．東京大学出版会．

❖本書の著者紹介（エドマンド・リーチ）

英国に生まれ，ケンブリッジ大学で数学と工学を修めたがのちに人類学に転じる。ビルマ（現ミャンマー），スリランカなどで現地調査を行う。本書のほか『人類学再考』『社会人類学案内』『聖書の構造分析』など著書多数。

❖執筆者紹介（片岡　樹）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科教授。タイ国を中心に，東南アジアの山地少数民族や華僑華人などの宗教を主に研究している。学部時代に本書の和訳が刊行されてむさぼり読んだことが記憶に新しい。感銘を受けた本は近藤紘一．1985．『サイゴンのいちばん長い日』（文春文庫）。